雪村周継筆『七隠士騎馬野遊図』主題の一考察

陳　達明

一

雪村周継は、永正元年（一五〇四）に常陸の太田に生まれた。禅僧としての経歴は全く不明であるが、近世の絵画史・画伝によると、雪村は曹洞宗の禅僧で、諱は「周継」、晩年の号は「鶴船」である。主に常州に住み、その絵画活動は関東、東北の僻地を中心にしていた。雪村は京に上ることなく、晩年は奥州の田村に隠棲し、孤高の画家として知られ、卒年さえはっきり分からない。ただし、天正十七年（一五八九）まで生存していたことが知られている。

雪村は山水、花鳥、人物画のいずれも優れており、その画は「異体」を専らにし、「筆力厚く」、「画風佳し」とされる。潑墨は「雅淡」で、「天真爛漫」を失っていない。当時、雪舟が「西辺」に、雪村が「東辺」に在り、人々は深く雪村の画を賛賞した。なかでも、故事人物画に現れた強い個性と溢れるユーモアは、特筆すべきである。雪村の故事人物画の内容は、主に中国の画題を取り入れて描かれたが、この類の作品は中国の同画題の作品と全く違う表現があり、時には複数画題を同一作品に取り入れる例もある（注1）。このような伝統的な表現方法を逸した考えかたについて、狩野永納は「奇思」と評している（注2）。

確かに、雪村作品の「奇思」や「異体」と表現される画面には、理解し難い一面がある。この場合、雪村作品の画題と、描かれた画面の表現は、誤解されやすい。本稿で取り上げる『七隠士騎馬野遊屏風図』（図一）はこのような一例である。画面の表現から見れば、七名の高士が馬に乗り、山水を楽しむ様子が窺え、雪村が好んだ『竹林七賢図』の画題と密接な関連があると思われやすい。実際にこの屏風図は、『竹林七賢』を主題とすると認定されている。管見では、この屏風図の主題と『竹林七賢』とは関連性がないと推測する。というのも、この屏風画は別の「七賢」の画題を示していると考えられるからである。本稿はこの屏風図の主題をめぐって、以下のように考察する。

右隻

左隻

図一　雪村筆『七隠士騎馬夜遊図屏風』六曲一双　個人蔵
「日本屏風絵集成」第四巻より

二

雪村筆『七隠士騎馬野遊屏風図』は、個人収蔵のため、その原作をなかなか見ることができない。『雪村周継画集』に本作は収録されていないが、『水墨画大系・雪村』と『日本屏風絵集成』に掲載されている。

この屏風画について、データーは以下のようである。

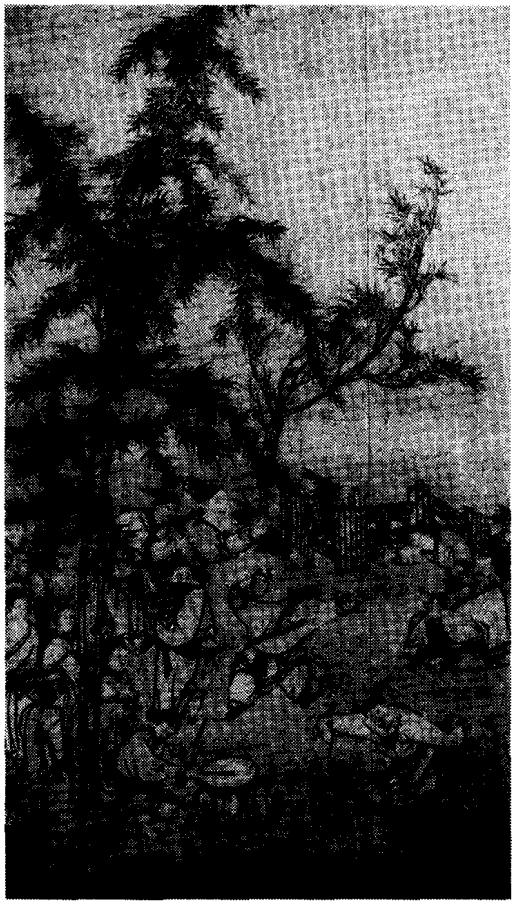
画題：『七隠士騎馬野遊図』
形式：屏風　六曲一双
素材：紙本、着色
寸法：縦１５５・０cm　横３２６・５cm

左右両隻の画面にそれぞれ「継雪村図之」の落款と朱文壺印「雪村」、白文方印「鶴船」を押してある。

右隻の画面では、山中に馬に乗った四人がいる、彼らは明月を鑑賞しながらも、誰かを待っている様子を表現している。左隻の画面では、馬に乗る三人が急ぎ前進しながら、談笑はとまらない。画面では三人横一列のように並んでいる。三人の表情は明るく、豪快な性格が描き出されている。両隻屏風合わせて七人の文人高士を描いている。恐らく、数字の原因で、本作の画題と「竹林七賢」の主題とを結びつけたと考えられる。

『水墨画大系・雪村』中の解説文は、次のように言う。

月を鑑賞しようと、山に向かう七賢人を画いたものである。右隻に画かれた霊芝を持つ士は、「七賢図屏風」では右隻の右端に横顔を見せている。この人物は後に西晋の武帝に登用された山涛と見なしてもよい。



図二　雪村筆『七賢酔舞図』絹本軸画　アメリカ個人蔵

この解釈文を読むと、この屏風図に描かれている七人は、魏晋時代の嵇康、向秀、山涛、阮籍、阮咸、王戎、劉伶の七人を指し、明らかに「竹林七賢」を主題として認識している。

この屏風図の主題は、果たして「竹林七賢」なのであろうか。

筆者は、先ず雪村が描いた「七賢」を主題にする作品を整理した。

「図三」、「図四」は、雪村が「竹林七賢」を主題とした作品である。それと今回取り上げた『七隠士騎馬野遊図』と比較して見ると、確かに両者の違いが見られる。

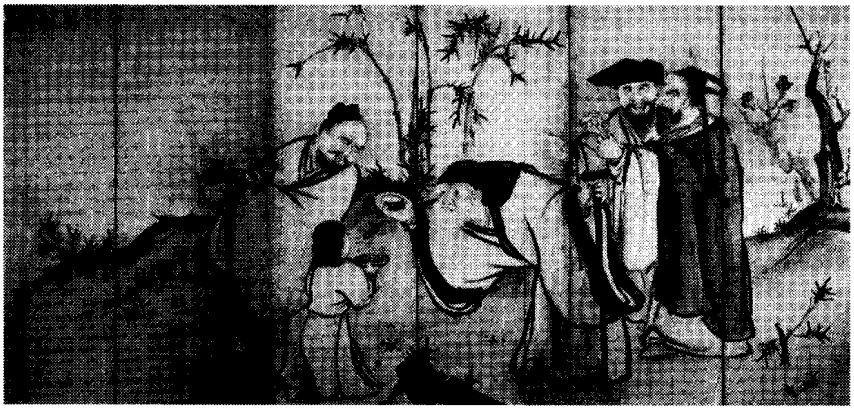
上表から見ると、1・2・3の三つ作品の画面は共に七人の物語を表現している。しかし1・2の作品と、3の人物表現は異なっている。馬に乗る人物の表現は、管見では『竹林七賢』の画題と結び難いものである。

さらに「竹林七賢」を主題した日中両国の主な作品をまとめて比較するため（雪村作品は含まない）、下表にまとめた（図四～九）。

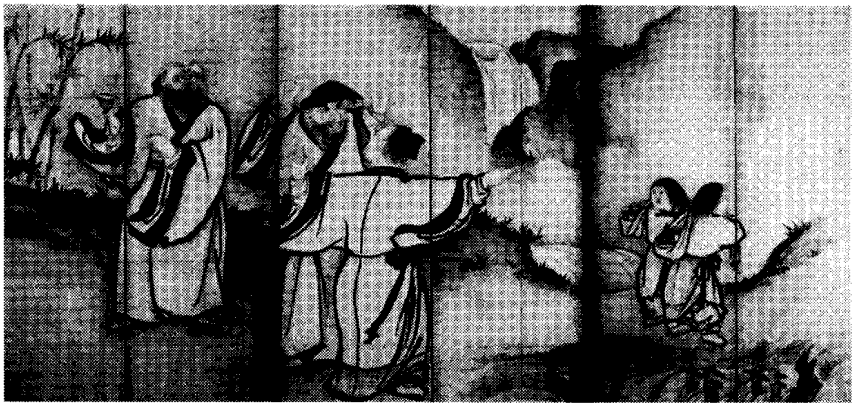
下表によると、中国、日本は言うまでもなく、『竹林七賢』を画題にした作品は、画家の考え方、芸術表現などそれぞれ違っていても、馬に乗る七賢という画面表現が見られない。それゆえ雪村が描いたこの「騎馬人物図」は、七人を描いたにもかかわらず、「竹林七賢」との関連が薄く、殆ど無関係と言える。

作品	画　題	様式	画面に表現される主な人数	人物姿態	画面の背景
1	竹林酔舞図	絹本軸画	七　人	酔後に踊たり、太鼓を敲くなどをしている様子	竹林なかの広場
2	竹林七賢図	紙本屏風	七　人	全員川辺に散歩、談笑する様子	山の中、渓谷、瀑布
3	七隠士騎馬野遊図	紙本屏風	七　人	全員馬に乗る姿	川辺、山の中

国籍	画名	形式	作者	制作年代	画面表現	所　蔵
中国	『栄啓期と竹林七賢図』	磚画	不詳	六世紀初	肖像画のような表現法で、七賢は座っている姿。	南京博物館
同上	『高逸図』（竹林七賢図残巻）	絹本、着色横軸	孫位	十世紀	七賢はそれぞれ酒を飲み、座る姿。	上海博物館
同上	『七賢図巻』	絹本、着色絵巻	劉仲賢	十五世紀	七賢其々琴、棋書画に楽しむ、坐っている様子。	台北故宮博物院
日本	『商山四皓、竹林七賢屏風図』（その中之一）	紙本、淡色六曲一双	狩野元信	十六世紀前期	竹林の中にいる七賢は散歩様子。	東京国立博物館
同上	『竹林七賢図』	紙本、水墨六曲一隻	啓孫	十六世紀前期	七賢は月のある夜、竹林に集まっている。	不明
同上	『竹林七賢図』	紙本、水墨六曲一双	長谷川等伯	十六世紀末	川邊の竹林にいる七賢。	京都両足院



右隻



左隻

図三　雪村筆『竹林七賢屏風図』六曲一双　畠山記念館蔵

『本朝画史』に、雪村の絵画について、「大抵略出新意、所用筆狂逸而有奇思。」（注3）と評しており、確かに、雪村の絵画には「新意」と「奇思」があるが、それは常にその主題と一致しており、主題から逸脱することはなかった。例の雪村が描いた幾つかの「竹林七賢図」のように、酔って、踊っている七賢があれば、竹林を楽しんでいる七賢もある。しかし、このような表現は決して画題の基本内容から逸脱していない。（注4）

現在認定される『七隠士騎馬野遊屏風図』という画名は、本来の画名ではないように思われる。雪村が、当初この作品を制作した時、どのような題名をつけたか、はっきりわからないまま、昭和六年に、福井利吉郎氏が『野遊図屏風』と題した。福井氏の解釈は以下のようである。

「牧野子爵蔵の「野遊図屏風」の如き、三春駒で名高いかの地方の騎馬野遊の状を描いて極めて自然の趣致に富んだものであるが……。」

福井氏は、この屏風図の画名を「野遊図屏風」としたが、それ以前に何の画名だったのかについては、知られていない。また、福井氏がこの画名を題した根拠も明白ではない。恐らく、現在の『七隠士騎馬野遊屏風図』という画名も、福井氏説に基づき、さらに画面上の七人を加えたものと思われる。「この屏風は福井利吉郎氏が言うように、現実の騎馬野遊の情景を描いた

右隻

左隻

図四　六朝時代『栄啓期と竹林七賢図』磚画　南京博物院所蔵

と解釈するよりも、主題はあくまでも竹林七賢であり、彼らの騎馬野遊をあらわしたものといえる」（注5）と林進氏は言う。

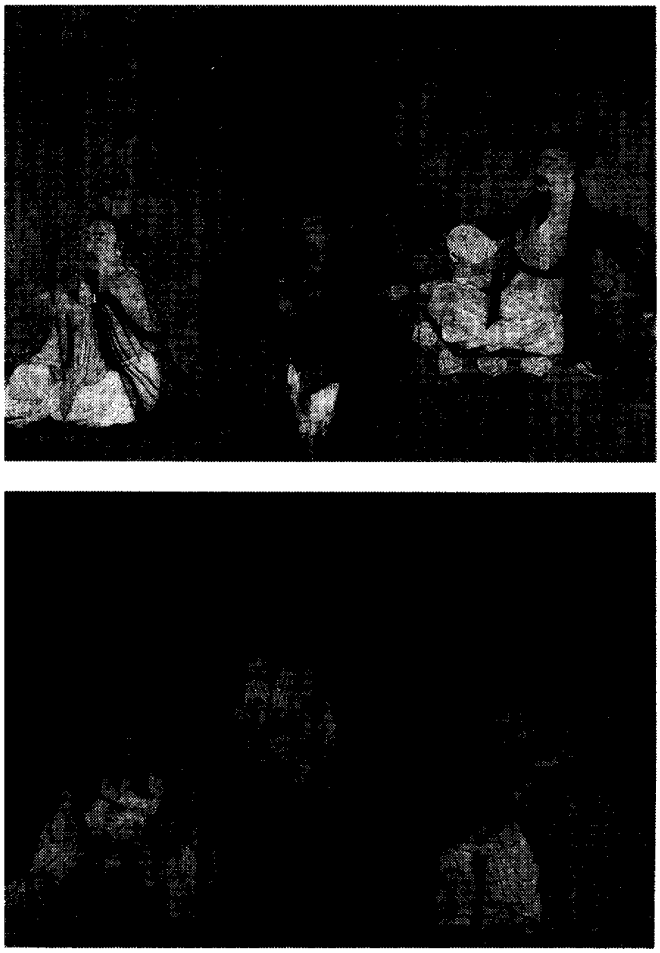
林進氏の判断の根拠は、室町時代中期の禅僧、季弘大叔に基づくようである。季弘大叔の『蔗庵遺藁』に収録されている「題竹林七賢図」という画賛がある。文は『五山文学新集』第六巻に収録されている、漢文で書いているので、そのまま引用する。

「……今観茲圖、六人乗馬、其一跨觳觫君、想必是江南人、有斯古画本、而吾邦之画工、摸而寫邪……。」

觳觫（こくさく）とは、牛のことを指す。季弘大叔は、馬に乗る六人と一人牛に乗る群像から、「竹林七賢」の主題を認めた。時は己亥暮春、即ち文明十九年、一四七九年である。当時、大陸の画本が既に日本に伝わったことが判明している。しかし、季弘大叔がこの「古画本」の主題を「竹林七賢」と判断した根拠は、単なる推測にすぎないように思われる。実際のところ、この「古画本」が日本に伝わった時、何の画題で示されていたのか、彼自身にも分からなかったと思われる。それ故に、季弘大叔は「想必是江南人」のことから、「竹林七賢」の画題を推測したのであろう。この推測は後に大きな影響を残したと言わざるを得ない。

三

季弘大叔の言う「古画本」は、大陸から伝来したも



（部分図）

図五　孫位筆（唐代）『竹林七賢図』残巻　上海博物館所蔵

のだった。しかし、中国の「竹林七賢図」について、上述の図表のようにまとめ、比較した結果、この騎馬人物と「竹林七賢」の関連が全く認められない。それではいったい、この七人は何の物語を示しているのであろうか。このことを考えるためには、まず中国の画題について調べなければならない。そこで、中国の絵画史に関する文献資料中から、「竹林七賢」以外の画題、すなわち別の「七賢」が存在するかどうかについて調べてみた。

南宋の鄧椿『画継』に、「七才子入関図」という記録がある。

「眉山老書生、不得其名。作「七才子入関図」、山谷謂人物亦各有意態。以為趙雲子之苗裔。」（注6）

「眉山老書生」が描いた「七才子入関図」は、鄧椿は実物を見ていない。黄庭堅（山谷はその号）の記録に依って記述しているのである。画題の内容について触れずに、「竹林」の「七賢」以外に、別の「七賢」に関する画題があることが判明した。この七才子は、明の張丑『真跡日録』には「七賢過関」と改められ、文は次のように記録される。

「呉新宇蔵李唐『七賢過関図』、絹本、浅降色、有楼鑰、黄潛跋尾、収蔵得地、精彩煥然、亦南渡奇跡。」（注7）

鄧椿の「七才子入関図」は伝聞から記録したもので

図六　劉仲賢筆（明代）『竹林七賢図』絹本軸画　台北故宮博物館蔵

図七　伝狩野元信筆『商山四皓・竹林七賢屏風図』六曲一双（左隻）
国立東京博物館蔵

あるが、張丑の記録は彼自ら見た李唐（注８）の作品の後に付す記録である。李唐が描いた『七賢過関図』が現存するかどうか、筆者手元の資料および管見の及ぶ範囲の資料からは検出できなかった。しかし、この記録に拠って、『七賢過関図』の画題を確認することができた。従ってこの画題は、北宋以前に成立したであろうと推測する。

元代に至ると、「七賢過関」の画題は、画家達によく描かれる画題になった。元代詩歌の中にも、多く『七賢過関図』を題した賛が見える。例えば、元代の曹伯啓『漢泉漫稿』には、『題七賢過関図』詩がある。当時、この屏風図「七賢」の人物群像に触れた人物として、唐の孟浩然、李白などの人物が知られていたが、明代に至ると、一般の人々にはすでにこの画題に描かれた七人が誰かはっきり分からないようである。常に「竹林七賢」の七人と混同するようになっている。

明代の文豪、楊慎でさえ、「七賢過関図」に表現された七人について悩み、ついにこの主題の由来を調べ始めたのである。調べた結果、彼は『升庵集』巻五に次の通り記録している（以下、原文のまま引用する）。

世伝「七賢過関図」或以為即竹林七賢。爾屢有人持其画来索題、漫無所拠。観其画、衣冠騎従、當是魏晋間人物意態。若将避地者、或謂即論語作者七人像而為画。爾姜南拳人云、是開元日冬雪後、張説、張九齢、李白、李華、王維、鄭虔、孟浩然

図八　啓孫筆『竹林七賢屏風図』六曲一隻　所蔵不明
「日本屏風絵集成」第四巻より

出藍田関、遊龍門寺。鄭虔図之、虞伯生有題孟浩然像詩：

風雨空堂破帽温、七人図裏一人存。

又有槎渓張輅詩：

二李清狂狎二張、吟鞭遥指孟襄陽、
鄭虔筆底春風満、摩詰図中詩興長。

是必有所傳。云七賢過関事、不経見於書傳而畫家乃傳偏。於好事者之家究其姓名、未的其誰何、先師文正李公嘗辨之。慎近見洪武中高得暘題銭舜挙「寒林七賢図」古風云：

騒壇逸響何寥々、作者逝矣誰能招
銑然七子美風度、乃有遺像図生梢、
衣冠半帯晋季態、人物絶是唐中朝。
想當朝政日休暇、擬采野景帰風謡、
青驢黄犢踏凍雨、蹇驢瘦馬衝寒飈、
醉鞭笑停似按轡、銀鐙戯拍催聯鑣、
看花多情且少待、尋梅有興非無聊、
此図我嘗見数十、高林大樹風蕭々、
掃除閑冗存簡素、松雪老筆才尤超。
方之粉墨巧塗染、奚止宵壤相懸遼、
尚疑高李六君子、当時未見潘逍遥、
道同気合志相感、雖曠百世如同僚、
畫史貌出有深意、況自昔日傳今朝、
屋梁落月看顔色、妙処不待窮模描。
君不見、袁安彊臥寒正驕、王維乃作雪裏之芭蕉。

右隻

左隻

図九　長谷川等伯筆『竹林七賢屏風図』六曲一双　両足院所蔵

又熊直題云：

七賢之名奚所徴、七賢去国身何軽、
風沙索寞幾千里、道傍見者難為情、
君不見、函谷関、青牛白板春昼閑。
又不是、玉門道、富貴生還致身早、
英雄出処貴有時、何用驅馳嘆衰老。
歳晩征途天雨雪、数騎連翩行欲歇、
不如覇陵橋上翁。破帽吟詩自清絶、
惜哉命不偶。奔走半道周、
人生遇坎珂、窮苦奚足尤、
左遷譽投散、逝者良悠々、
他人未足説、所惜柳譽劉、
天涯相聚一回首、往事於人竟何有。
莫念玄都旧種桃、且往愚渓勝裁柳。
風流畫史眞絶倫、毫端点染太精神。
王郎珍蔵又十載、展図示我労重陳、
労重陳、此意祝君宜書紳。

二詩雖不工、可考七賢姓名。据此則高適、李白、孟浩然、劉禹錫、柳宗元。不同時潘逍遥、宋人又在後矣。合而図之、繆甚亦不足辯也。書画譜云、眉山老書生不得其名、畫七才子入関図、山谷謂人物各有意態、博雅之士賞其畫、則可必湊合姓名不亦鑿乎。（傍線部筆者）

楊慎の調査によって、「七賢過関」という画題の存在が明白になったと言える。文章の冒頭に、この調査の

理由を述べた箇所がある。すなわち楊慎に依頼して、七賢図の賛を求める人が後を絶たず、しばしばやって来るからである。しかし、人は皆これを「竹林七賢」と思っていた。画面を見ると、描かれた人物の衣服の様式と飾りの表現は、恐らく魏晋時代の人物と思われ、或いはこの七人は論語の作者及び弟子の七人ではないかと思われるが、姜孟濱挙人が言うように、これはある年の元日に雪が降った後、張説、張九齢、李白、李華、王維、鄭虔、孟浩然などの七人が、藍田関を出て、龍門寺に遊んだことを、鄭虔が描いたものという内容であった。

鄭虔は、画家として絵画史上のその名は残っているが、この画題では唐以前の記録が残っていない。上述のように、この画題が初めて見られる資料は南宋の鄧椿であるが、画題に出現する七人の生きた年代が違うにもかかわらず、全て唐代の人物である。その後、宋の潘逍遥を加えた画題があることにより、成立時代は北宋以前であることが明らかである。

画題の由来は「不経見於書傳而畫家乃傳偏、於好事者之假究其姓名、未的其誰何。」である。つまり、「史書から伝わったものではなく、画家の創作である」というのが楊慎の結論である。その描かれた人物は何の根拠もなく、ただ「合而図之」として、人物を併せて描くことになったのである。その人物の入れ替えも画家の勝手である。楊慎の調べによると、この画題に現れた賢人は全部十二名、二組に分けられる。第一組は張説、張九齢、李白、李華、王維、鄭虔、孟浩然の七人であり、第二組は高適、李白、孟浩然、劉禹錫、柳宗元、王維、宋人潘逍遥の七人である。この二組は同じ藍田関を出るものの、違う環境で表現されている。第一組の七賢は、龍門寺に遊んで藍田関を出、第二組の七賢はそれぞれの「人生遇坎珂、窮苦奚足尤、左遷譽投散、逝者良悠々」という左遷の状況下で藍田関を出るのである。それ故に、画面表現には、風流洒脱な七賢がいれば、雨雪に驢、牛、馬に乗り、「寒冷凍雨」の中を左遷される七賢もいる。

この二組の人物中、王維、孟浩然、李白の三人は不動であるが、恐らくは画題成立当初から、この三人を中心とし、後に他の人物を加えた物語を展開したと考えられる。従って当時、七賢の人物はまだ固定されていないということも推測される。この画題は歴史上の事件ではなく、文学的なものであり、作り話であろうと楊慎は考証する。さらに彼はこの創作画題を「其の情状は実に荒謬である」と酷評した。しかし「荒謬」に組み合わされた物語の人物は、すべて歴史上実在の人物である。ただ七人の枠組みの中で、具体的に人物を入れ替えるのは画家の好みによっているのである。

楊慎が調べ見出した十二人の「七賢」を略述しておく。

(1) 張説（六六七～七三〇）、字は道済、洛陽の人。則天武後のとき、太子校書を授けられ、玄宗のとき燕国公に封ぜられたが、後に岳陽に貶された。文辞を善くし、当時の許国公（蘇頲）と合わせ「燕許大手筆」と呼ばれた。

(2) 張九齢（六七八～七四〇）、字は子寿、韶州曲江の人。官は中書侍郎同中書門下平章事に至る。詩は清新、剛

健な風格を備えていた。後に李林甫の排除を招遇し、地方に貶された。

(3) 李白（七〇一～七六二）、字は太白、青蓮居士と号す。中国傑出の大詩人である。

(4) 李華（七一五～七六二）、字は遐叔、賛皇（河北省）の人。安史の乱で、反乱軍に捕えられ、偽の官職に就き、乱の平定後に貶された。

(5) 高適（七〇二～七六五）、字は達夫、河北省景県の人。辺塞詩人として著名。後に淮南、西川節度使を歴任、勃海の候に封ぜられた。

(6) 孟浩然（六八九～七四〇）、襄陽の人。若いころ鹿門山に隠居生活を送ったが、四十代で長安に遊び、科挙に失敗し、後に荊州の幕僚に従事した。写景詩が有名で、王維と併称される。

(7) 王維（生年不詳～七六一）、字は摩詰。開元の進士。安史の乱で安禄山に捕えられ、偽官を授けられた。乱の平定後、降職された。晩年、道家・仏教を好み、半官半隠、悠々自適の生活を送った。「詩中に画あり、画中に詩あり」と評され、中国の文学と絵画に大きな影響を残した人物である。

(8) 韓愈（七六八～八二四）、字は退之。河南省河陽の人。貞元年間の進士。国子監博士など要職を遍歴し、憲宗の仏骨を迎えるという命令に反対して罪に問われ、潮州に左遷された。古文復興運動を提唱し、柳宗元とともに「唐宋八大家」の領袖である。

(9) 柳宗元（七七三～八一九）、字は子厚、河東解州の人で、「柳河東」と呼ばれた。韓愈と同じ貞元年間の進士。藍田校尉に任じ、後に監察御史に昇進したが、別の事件に巻き込まれ、永州司馬に貶された。そのため「柳永州」とも呼ばれた。詩は清新な味を持っている。

(10) 劉禹錫（七七二～八四二）、字は夢得、洛陽の人。貞元年間の進士。監察御史を授けられる。後に柳宗元と同一事件に巻き込まれ貶された。その後、裴度に推薦され、礼部尚書に任じた。詩は平明で、新鮮な一面を開いた。

(11) 鄭虔（生卒年不詳）、天宝年間初期には協律郎で、開元二五年（七三七）に広文館博士を授けられた。書画を善くし、書画を玄宗に献上し、玄宗はその詩書画を「鄭虔三絶」と褒めた。しかし、安史の乱で偽官に就き、乱の平定後、偽官の罪に問われ、台州司戸参軍に左遷された。画名は『唐朝名画録』、『歴代名画記』、『図画見聞誌』などに見える。

(12) 潘逍遥（生卒年不詳）、名は閬、字は逍遥。宋代初期の名士。狂放傲慢な性格を持つ。皇帝の信用を得たが讒言に遭い、無実の罪に問われ、牢に繋がれた。

以上の十二人は全て個性的で、官吏の道に一度挫折した経験者ばかりである。この共通点によって、「七賢過関」という主題画が作られたと想定する。また北宋の時点で、「七賢」の具代的な人物がまだ固定されていなかったと推測できる。特に潘逍遥が「七賢」に入るということは、画題の成立年代を北宋以前と認めなければならない。

画題については、楊慎の考証に拠れば「史書に伝わらないが、画家の発想によるものである」と明白である。しかし、何故七賢が「藍田関」と結びついたのか、この点について楊慎は言及していない。

「藍田関」は、もと「堯関」という。その遺跡は陝西省高県の西北にある。堯山の隣にあることから名づけられた。古くから中原と南陽盆地を結ぶ交通の要道である。二〇七年、劉邦が秦軍と戦ったとき、ここで包囲され、堯山に迂回し、藍田の南から逆に秦軍を攻撃し、勝利を収めた。その後、堯関は「藍田関」と改められ、唐代では長安の南と南陽道を結ぶ最も近い出入り口である。長安から洛陽地方に追放された官吏は、必ずここを経由したのである。

楊慎の考察では、七賢が「藍田関」を出ることは上述のように二説ある。一つは、姜南挙人の説である。「七賢」がこの「藍田関を出て、龍門寺に遊ぶ」というのが目的である。もう一つは、高徳陽の「文人雅集」説である。この二説の根拠については、楊慎は全く触れていない。

「龍門寺」とは、龍門石窟の総称で、洛陽の南約十二キロメートルにある。地理的に考えると、姜南挙人の説が合っている。しかし韓愈が含まれている。筆者は、主題が韓愈の左遷と結びついていると考える。その理由は、韓愈の詩「左遷至藍田関以示侄孫湘」に、「雲横秦嶺家何在、雪擁藍関馬不前」と言う句があるからである。左遷された韓愈が雪中に馬に乗って藍田関を通過する瞬間、馬が止まり前に進まないという状態の描写は、「七賢過関図」の原型であると考える。

「七賢過関図」には、馬に乗る賢人の他に、「青驢黄犢」に乗る賢人もいる。これは李白か孟浩然を指すのであろうう。『四庫全書・子部』所収「御定歴代題画詩類」に、元代の王頤が題した『風雪藍関図』、同元代詩人牟峴の『題王維画孟浩然騎驢図』、さらに元代の文人、元好問の『李白騎驢図』などの題賛が残っている。これらの題賛による、『七賢過関』に驢、牛に乗る賢人を推測することができる。

同時代に生卒年の異なる人物を集めて結成した画題は、殆ど民間で形成されたものである。例えば、『虎渓三笑』、『八仙図』等の画題は、民間に広く流伝された典型的な俗画である。明代の胡応麟は、『少室山房筆叢』巻十八に、『七賢過関』も「俗画」と称している。

歴史上、実在の人物を集め、伝説を絵画化し、世々代々伝わっていく。中国絵画史上、そのような画題、或いは主題の絵画は少なくなかった。その中で、完全に異なる年代の人物を同一画面に画くことも珍しくない。『七賢過関』は、同様

に異なる年代の人物を羅列することを主題する絵画であるが、楊慎は「荒唐無稽な組み合わせで、深く弁明するに及ばない」という態度を表明した。確かに、このような主題に対し、深く追求する必要はないとも言えるが、以上のように追求することによって、中国絵画史上の画題について判明できたことは重要である。

四

以上の考察から、「七隠士騎馬野遊図屏風」と認定された雪村の作品は、事実上の主題が「七賢過関」であることが判明した。この主題と「竹林七賢」の主題とをなぜ取り違えたのか。その理由は、「竹林七賢」の画題が、日本の画人たちによく理解され、よく利用して制作したからだと考えられる。

中国から日本に伝わったのは、ただ絵画作品だけではない。作品と同時に画題も日本に伝わった。特に遣唐使、遣宋使が頻繁に往来し、日本の文学、芸術に大きな影響を与えた。例えば天長四年（八二七）に編集された勅撰詩集『経国集』には多くの中国の画題を記録された。また、個人で撰集した文集にも、多く中国絵画の画題を記録している。都良香が撰した『都氏文集』には、「蒼頡賛」「廬思道賛」「白楽天賛」等の画賛が記録される。さらに、島田中臣の『田氏家集』には「題竹林七賢図」という七律詩もある。

「晋朝澆季少晨風、七子超然不混同。欲対琴樽終性命、何要台閣録勲功。
生涯毎寄孤雲片、世慮都在一酔中。若遇求賢明聖日、廟堂充満竹林空。」

詩の内容から見ると、作者が「七賢」の典故をよく知っていることがわかる。この『田氏家集』には他にも「七賢」のことに触れた詩がある。例えば「夏日、竹下命小歌」と題する詩には、「応是他生作七賢」という句がある。当時、上層階級では、中国の典故をただ知るだけではなく、自分の意見、見方も述べている。彼らが理解した画題を画家に伝え、そして画家が描いた画中に更に自分の思いを託すのである。再創造によって完成した作品は、中国から伝わった作品と表現が違ってくる。しかし、いろいろな要因で、伝わった画題がその内容と関係する文字資料がなくなり、絵画のみが遺ってしまったという事も考えられる。このため、画面に表現された内容の主題が分からなくなってしまったケースが少なくないし、また他の画題と混同し易くなるのである。

現在、「七隠士騎馬野遊図屏風」と題された雪村の大作は、初めから左、右二隻ともに題名が書いていない。「野遊図」という名づけの根拠は、恐らく屏風に三人と四人の七人を分けて描いたことを根拠にするかもしれない。だが、三人と四人を分けて描くという表現方法は、雪村が大画面を描く場合のものである。畠山記念館に収蔵される「竹林七賢図屏風」

（図三）の画面もこのような表現をしているが、「野遊図」の画題とは何の関連もないと言える。両者を比べて見れば、実に大きな違いがあることが明白であろう。両作品の画面には同じように七人が描かれているが、馬の有無が作品の主題を分ける。即ち、「七賢過関」を主題とした作品には、馬が描かれてなければ画題が成り立たないのである。

以上、現在「七隠士騎馬野遊屏風図」と題された画の主題をめぐって考察した。この図の画題は、「竹林七賢」ではなく、「七賢過関」画題と深い関連があることを立証した。従って、この不本意な画名は、「七賢過関」に改めるべきではないかと筆者は考える。

（注）

1 陳　達明「雪村周継筆『竹林七賢図』の画題をめぐって」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第四八輯・第三分冊（2003年3月12日）

2 狩野永納著『本朝画史』　笠井昌昭等注訳　同朋社1985年版

3 同注2

4 同注1

5 林進『雪村筆「竹林七賢図屏風」（畠山記念館所蔵）について』「日本屏風絵集成」第四巻　講談社

6 鄧椿『画継』の記事は北宋熙寧七年（1074）から、南宋乾道三年（1167）間の画家二百十人余りの伝記及び評論。于安瀾編『画史叢書』第1冊　上海人民美術出版社1962年版

7 文淵閣本「四庫全書」子部芸術類

8 李唐（生卒年不詳）、北宋末から南宋初めに画院に居た画家。字は晞古。山水人物画を優れ、南宋四大家の一人。